孔子の四猿（しざる）

▲台北、孔子廟前の四猿像

中国の思想家、教育者、儒教の創始者である孔子を祀る台北の孔子廟。その敷地の南東コーナーに四種の猿の像が据えられています。日本でもおなじみの「見ざる・言わざる・聞かざる」の三匹に加えて「せざる」が鎮座。愛らしい姿に惹かれ、なぜ四猿？と素朴な疑問が湧きました。どんな意味があるのか儒教の考えを調べてみました。

三猿のルーツは？

手で目、耳、口を覆った猿の像。日本人にとっては日光東照宮の三猿「見ざる・聞かざる・言わざる」が有名ですが、三猿像は東南アジアのほぼすべての国、インド、中東、アフリカなど各国に存在。さらに、そのルーツをたどっていくと古代エジプトにまでさかのぼることになるとか（詳細は飯田道夫氏の著書「世界の三猿」人文書院刊を参照）。古代エジプトのメンフィス神学の理念「正義」をあらわし「正しくないことは見るな、聞くな、考えるな、口に出すな」という教えを猿の像は具現化。もともとは三猿ではなく四猿だった可能性が高いのだそうです。

四猿が本当？

孔子を祖とする教学、儒教は社会で人があるべき道を説き、『論語』にその教説をおさめています。この『論語』に「非礼勿視(ひれいぶつし)、非礼勿聴(ひれいぶつちょう)、非礼勿言(ひれいぶつげん)、非礼勿動(ひれいぶつどう)」という言葉が書かれています。「礼（社会規範や道徳）に反することを見たり、聞いたり、言ったり、おこなったりしてはいけない」。このうち、いちばんたいせつなのは四番目。感覚器官と言語器官を制御するのは前置きであって、究極の目的は「正しくおこなう」ことであると孔子は説いているのだそうです。「せざる」像から一見「何もしない」と読み取ってしまいがちな消極的姿勢ではなく、その先に能動的な実践がうながされていたのです。こんな大事なことをあらわした四番目の猿がなぜ世界各地では省かれてしまったのでしょうか。台北の孔子廟のかわいい像からそもそもの教えを知り、意識していきたいものです。

▲左より「非礼勿視」、「非礼勿聴」、「非礼勿言」。もしかして世界一かわいい三猿？